

謡い方のポイント（第二十八回白謡会研究会）

絵馬

初番物は、ほとんどが前シテは後シテの化身としての尉、後シテが神様ですが、例外的に前シテが女性で、後シテが神様（賀茂）とか、本曲のように前シテは尉ですが、後は女性（天照皇大神）という曲もあります。

しかし、シテが女性であれ、男性であれ、初番物の謡の心得を忘れてはなりません。特に本曲においては、後シテが女性であることを伏線にしているかのように、前場・中入り前の地謡が柔吟であること、後シテの舞が神舞でなくて、中之舞になるなどから、ともすればソフトな感じを受けがちですが、これに惑わされないことが肝要です。

即ち、全体を通じて、爽やかに、力強く謡うべきで、軟弱な謡にならないように心がけるべきです。柔吟であっても、きっぱり感を大切にし、情感に走らないことが肝要です。

シテは、前シテの尉は装束が一級の正装（白大口）ですから、厳かな謡を。軽く流さないでしっかり目に、教科書的な折り目正しく謡って下さい。後シテは、言うまでもなく、きっぱりと、おおらかに、高らかに、気品ある謡であって欲しいものです。

ツレも出番が多くて、重要な役割であることを意味しています。丁寧に気品ある謡を期待します。なお、二丁裏の上歌で、返しを謡うときは、ツレとしての本領ですから、シテの音域から離れて引き立てて、高めに謡います。

ワキも正装をした勅使ですから、力強く、確りめに謡うべきことは言を待ちません。

役処も地謡も共に、難解な節回しが無いのに一級に格付けされているのは、偏に、気品のある曲趣故であることを銘記して下さい。

頼政

本曲を好む人と苦手な人が拮抗しています。元来、謡に上達したいと思ったら、先ず曲の好き・嫌いを持たないことですが、かくも素晴らしい「頼政」を苦手とする人（特に女性に多い）が意外に多いのは困ったことです。

前置きが長くなりましたが、この曲を苦手とされる方の理由は明白です。それは、十丁裏のシテの「語」からキリまでの戦物語です。能や舞囃子でもこの部分が見どころですが、同時にここは、謡どころでもあります。

この部分は、極めて臨場感豊かで、さながら時代劇の映画か絵物語を視ているようです。それ故に、どちらかと言えば、力強さを表現できれば、謡しやすい部分でもあると言えましょう。

源頼政は、平氏全盛の時代に、武将であり、公卿であり、歌人であった人。随分ストレスも溜まっていたと見えて、後に平氏に背き、敗れて、平等院で自決しますが、謡い方に関係があるのは、その享年です。

私は、謡をはじめてから長い間、この人は老体であると思いこんでいましたが、ある時生涯を閉じたのは44歳であることを知り、愕然としました。

前シテは、通常の尉ものの謡で、平等院からの眺めを「名所教え」する辺りは、「融」と同じノリで良いのではないかと思います。後シテの謡は、あくまでも、上述の年齢を考慮すべきで

ありましょう。

ワキはさりげなく、硬く、重くならないよう。あくまでも傍観者ですから・・・。

シテと同様に難しいのは、地謡です。八丁裏の上歌は力強く、心持運びめですが、サシ以降は、修羅物の地謡らしく、強く、サラサラと謡います。決して「まったく」と謡わないで下さい。

修羅ノリになってからですが、緩急と、随所にある「心入れ」（例えば十一丁裏の、「馬をば・下手に立てて、など」は師伝によりますが、ゆるがせに出来ないところです。なお、十一丁裏一行目の呑み節は、「通小町」にもありますが、特殊な節回しです。

浮舟

源氏物語を題材とした能（謡）には、本曲の他、葵上、野宮、夕顔、玉鬘など数々ありますが、この中で、「浮舟」と「玉鬘」とは、共に四番目物（略三番目物）として性格付けがなされていて、謡の趣ももかなり似ています。

謡の構成自体からして、ワキの道行、シテの一セイ・サシ・下・上歌、そのあとワキとのやり取りがあって、クリ、サシ、クセと続くところまでは同じです。後場においても、ワキの待謡のあと、後シテが中音の一声で、静かに登場し、最後は柔吟の修羅ノリで締めくくるところも共通です。

謡として、両者の相違の最たるところは前シテの声調でしょう。「玉鬘」では、紅無しで登場するのに対して、「浮舟」では紅入りのシテですから、張り詰めた華やぎを表現して欲しいものです。

後シテの謡は、一句たりとも気を許せません。いつも申し上げていることですが、柔吟の中音は思い切って低めに出ないといけないのですが、ここでも同じことが言えます。

個別の節扱いについて言えば、二か所の三つユリ（八丁裏）。そして、三つユリの変形とも言える、九丁表の「・・・知られぬ」の振り方が要注意です。

ワキは旅僧。取り立てて特徴がありませんが、それ故に、折り目正しく、地味に徹して、シテを引き立てましょう。

地謡について言えば、山場と言えるのは、哀しい恋を、情緒豊かに謡い上げるサシとクセ、それとキリの謡です。キリでは、耳慣れない節付けがある上に、修羅ノリ固有のリズムを生み出さなくてはなりませんから、気を許せません。なお、修羅ノリですから、「浮キ（ウ）」で生み字を出さず、後（あと）のゴマ点で浮くことになりますので、ご注意ください。

キリの謡は、予備知識なしでは全く意味不明で難解ですが、これは、原典を読んでいると分かります。即ち、原典の「帖」のストーリーを要約すると、次の通りです。

・・・浮舟は薫により宇治に囲われるが、彼の留守に忍んできた匂宮とも関係し、板挟みの立場に悩む。やがてことが露見し、追い詰められた彼女は自殺を考えるが果たせず、山で行き倒れているところを、横川の僧都に助けられる。その後、僧都の手により出家し、薫に復縁を迫られながらも拒み続ける・・・

こんなことを知っていても謡は上手にはなりません、些かの謡う楽しみを増すために役立ちます。つまり、謡の上達のためでなく、謡を楽しむため、シテに関する事柄を雑学的に知っておくのも悪くありません。

誓願寺

本曲は揺るぎもしない、堂々たる三番目物です。本来ならば、九番目物あたりの格付けでも良いのですが、難点と言えば、筋書きの展開に下世話な要素が微塵もないこと、言い換えれば、初番物にも通ずる生真面目一方な（換言すれば面白味、芸術性に欠ける）ストーリーであるからではないかと思えます。

例えば、本格三番目物の「井筒」にしても、「野宮」にしても、女性らしい情感の発露がありますが、本曲の主題は仏法礼賛としか思えませんから、西洋音楽に例えれば、「井筒」がシャンソンとすれば、本曲は讚美歌みたいなものでしょう。和泉式部は恋愛経験が豊富だったようですから、逆に、全てを知り尽くした結果、宗教心が厚くなったと解釈すれば、それはそれで面白いとも言えます。

以上のことを踏まえての謡い方ですが、総じて、格調の高さを意識することが肝要です。

具体的にどうということかと言えば、シテ、ワキ共に、几帳面に、正確に謡うこと、即ち節を間違えないことでしょう。読み違いなども禁物です。

シテ謡は、時によっては個性（言い様によっては「癖」）を発揮することで、面白みを増すこともあります。本曲においては、個性的な謡でない、言い換えれば教科書的な謡の方が良いように思います。

ワキも極めて大事な役処ですから、落ち着いて、じっくりと謡うことを期待します。

地謡も、簡単なようでも、なかなか間合い、節回し共に、年功を要します。八丁裏の「御法の御舟の・・・」は、初心のとき、節回しをきちんと覚えていないと馬脚を現す個所でしょう。

以 上